２０１８年（平成３０年）７月１９日　木曜日
東奥日報　１９面　掲載

第100回
全国高校野球
青森大会

第７日

ベスト４ まず２校

第１００回全国高校野球選手権青森大会は第７日の18日、弘前市のはるか夢球場で準々決勝２試合を行い、八学光星と聖愛が準決勝進出を決めた。八学光星は本塁打３本を放つなど大間を猛打で圧倒、投手２人も大間打線を無安打に抑え10－０の六回コールドで勝利を挙げた。聖愛は１点を追う九回、３番葛西の適時二塁打で５－５とし延長戦に持ち込むと、延長十二回、犠打や四球などを絡めて一挙６得点。11－５で弘前東を破った。

第８日の19日も、同球場で残りの準々決勝２試合を行い、４強が決まる。（本紙取材班）

光星15安打10点

大間無安打

【大間―八学光星】１回裏、光星無死、近藤俊が右中間席に先頭打者本塁打を放ち、１―０と先制。捕手・岡本（大間）、投手・佐々木月①（同）

▽準々決勝（はるか夢）

大間	0	0	0	0	0	0	0
八学光星	2	1	1	1	2	3×	10

（六回コールド）

（大）佐々木月―岡本
（八）山田、後藤―太山
▽本塁打　近藤俊、長南、但井（八）
▽三塁打　近藤俊、矢野（八）▽二塁打　但井、長南（八）

【評】八学光星は初回、先頭近藤俊の右越えソロ本塁打で先制。三回には３番長南、六回には５番但井（たい）も本塁打を放つなど猛攻、六回までに15安打を浴びせ10―０でコールド勝ちした。

大間は主戦佐々木月がつかまり、打線も無安打に抑えられた。全ての回で三者凡退に沈んだ。

「力は出し切れた」

○…快進撃を続けてきた大間は県内屈指の重量打線に力負けした。主戦佐々木月は15被安打で10失点。それでも「持っている力は出し切れた」と表情は晴れやかだった。

八学光星の初回先頭打者本塁打にもひるまず、二、三、四回は最少失点に抑えるなど気丈に立ち回った。捕手岡本も強気にリード。「長打を狙って振ってくるはず」と外の変化球で芯を外し、外野フライを量産した。ただ、「追い込んでからの詰めが甘かった」（佐々木月）と、許した３本塁打を振り返った。

豊川監督は「８強という結果もそうだが、その過程で選手たちがたくましく成長してくれた」と声を詰まらせた。佐々木月は「後輩たちの力があり、学校、地元の方々の応援があったからここまで来られた」と感謝し、最後の夏を終えた。

初回から流れ 圧倒

光星

ハイライト

本塁打が３本飛び出し、大間打線を無安打に抑えるなど攻守で力を発揮した八学光星。自身も本塁打を放った主将長南は「調子が良くなかったが、回復の兆しとして打てて良かった」と手応えを語った。

初回、先頭近藤俊が猛打の流れをつくった。「安打で投手にプレッシャーをかけたい」。４球目、内角の直球を振り抜くと、打球は伸び右翼スタンドへ落ちた。想定外の本塁打に「二塁を踏んだあたりで気づきました」と笑い「うれしかった。クリーンアップも勢いづけられた」と喜んだ。

６回までの安打は長打７本を含む15。投げても先発山田と２番手後藤が２人で零封するなど強豪の意地を見せたが、仲井監督は「長打はたまたま。（打撃は）まだやれる。完璧ではない」と辛口評価。「一戦必勝。勝てたことを生かしたい」と冷静だった。

長南は「勝ち上がってきた分、大間も勢いがあり一体感があった」と振り返る。次戦は準決勝。「いかに自分たちの野球ができるかが大切。全力疾走など、細かいことを忘れず臨む」と意気込んだ。（秋村有香）

試合終了後のあいさつで八学光星の主将・長南（左端）と握手し、言葉を交わす大間の主将で主戦・佐々木月（左から２人目）ら大間ナイン

【八学光星】		打	安	点	振	球
④	近藤俊③	4	3	2	0	0
⑥	武岡②	4	1	1	0	0
⑧	長南③	3	2	1	0	1
⑦	東③	3	0	0	0	1
③	近藤遼②	1	0	0	0	0
R3	但井③	3	2	2	0	0
⑨	矢野③	3	2	0	0	0
⑤	下山②	3	2	1	0	0
R5	島袋②	0	0	0	0	1
②	太山②	3	1	0	0	1
①	山田②	0	0	0	0	0
H	吉田③	1	0	0	0	0
1	後藤②	1	1	1	0	0
H	伊藤②	1	1	1	0	0

犠	盗	失	併	残		打	安	点	振	球
2	4	0	0	10		30	15	9	0	4

投手	回	打	安	振	球	失
山田	4	12	0	6	1	0
後藤	2	6	0	4	0	0

東奥日報社提供

この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです